

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	育てたい人間像（2009年）
Author(s)	浜本, 純逸
Citation	国語教育思想研究 , 27 : 45 - 49
Issue Date	2022-12-01
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00053345
Right	
Relation	



育てたい人間像 (2009年)

浜本 純逸

1. はじめに

二〇〇二年の五月、オランダ旅行をしたとき、アムステルダム郊外にあるチューリップ公園として世界的な有名なキューケンホフ植物園に行きました(昔、ここが王室の菜園であった所からこの名前で呼ばれるようになった。キューケンホフとは、「料理のための」というオランダ語)。美しい花の庭園です。その時は、赤・白・黄のチューリップがいっぱい咲いていました。

散策していると、世界の庭園というコーナーに出会い、イギリス・スペインなどと順番に経巡っていくうち、日本もありました。松を背に築山をあしらひ、滝も池もありました。竹藪があり、その手前には桔梗が咲いていました。小さいながら美事な日本の庭でした。

よく見ると、日本コーナーの表示板の右下には[鳥取県]とあるではありませんか。私は、思わず、となりで見入っていた数人の西洋の人に「これは私の県ですよ」と話しかけていました。ガイドに聴くと、キューケンホフ植物園と鳥取県の花回廊とが姉妹庭園提携をしているそうでした。私は、鳥取県人のスケールの大きさに感心したことでした。

先ほど、森原美登先生からご紹介いただきましたように、私は七年前に鳥取大学教育学部に二年間勤めましたが、その時に森原先生との出会いがありました。その後定年退職し、東京の私立大学に七十歳の定年まで五年間勤め、鳥取に帰ってきました。二年間鳥取大学に勤めた間に鳥取が気に入って、この地を「終の棲家」と定め、帰ってきた次第です。

鳥取が気に入ったわけは、いろいろありますが、一つは鳥取の人々の心の優しさを感じ入ったことです。道を歩いていて出会った人々の挨拶に心がありました。二つは鳥取の街が美しく清潔であることに感心したことです。道路がきれいに掃除されていて折々の花が飾られており、文化の高さを

感じました。三つめは、魚や野菜が新鮮で自然の味が有ったことです。四つめは、鳥取の人々の言葉に優しさを感じたことです。このことは、私の編集した『現代若者方言詩集』(大修館・二〇〇七年刊)に書いておきました。遠くからやってきた新参の鳥取市民をお招き下さって有り難うございます。

標題の「育てたい人間像」は、教育研究者としての私の念頭から離れない課題でした。私は、高校卒業までを愛媛県今治市で過ごし、学生・院生・大学助手の十三年間を広島で、大学教員としての十年間を福岡で、その後の二十年間を神戸で過ごし、鳥取・東京と各地を遍歴してきました。本日は、その間にテーマ「育てたい人間像」について考えてきたことの履歴を語ってみたいと思っています。

私の話には確かな結論はないのですが、宮澤賢治が「求道すでにみちである」と言っているように、『何かを求めることが、つまり生きること』なのではないか、とも思い、考えてきた道筋をたどることによって、皆さんとともに、この課題を深められればと願っています。どうか、よろしく願いいたします。

敗戦後、焼け野が原の中で印刷所の荒廃や用紙不足を克服して作られた第六期国定教科書(石森国語)『こくご』(一・二年生用)、『国語』(三年生以上)の十五冊には、戦後民主主義の精神が盛り込まれていました。一年生用教科書の巻頭には、編集者・石森延男作の、次の詩が載せられていました。

おはなをかざる みんないいこ・・・(芸術)

きれいなことば みんないいこ・・・(文化)

なかよしこよし みんないいこ・・・(平和)

そこには、やさしくリズムカルな言葉で民主主義国家の理念を歌い上げ、文化国家を建設する子ども、平和国家を建設する子どもが、「育てたい人間像」として端的に表現されていました。

当時、小学四年生であった私たちは、本のない時代のこととて、一年生の教科書も読んでいました。なぜか、私にはこの巻頭詩が強く印象に残っています。とりわけ「仲良しこよし」という言葉は、ときどき思い出してつぶやくことがあり、私の人間観の根っこに座ったように思います。

「仲良くすること」は、隣の人との関係づくりから始まって、地域の人々との関係づくり、国家間の関係づくり、さらには国家を越えた人々の関係づくりなどの課題が立ち現れて、言葉で言うほどたやすい問題ではありません。「仲良しこよし」は、それぞれのレベルでの対立や葛藤及び紛争をどのように克服していくか、という重い課題を私たちに突きつけます。その課題を考えていくとき、人は、人類の一員としての人間になっていくのではないのでしょうか。

2. これからの社会の課題

～育てたい人間像を考えるために～

これからの社会の課題は何であろうかと問われた時、環境問題などいろいろと指摘できると思いますが、私は、二つのことが重要な課題である、と考えています。

一つは、核兵器の廃絶の問題です。戦争をして核兵器を使用することは、人類の絶滅を意味します。戦争と核兵器の使用は最大の環境破壊です。未来の人類の生存は、核兵器の廃絶なしには考えられません。核兵器を持っている大国が小国の核兵器製造計画に中止要求をすることは道義的に不遜と言えるでしょう。それは国家間のモラルの問題です。わたしたちにとって核兵器は何であったか、どのようにして核兵器の廃絶を実現していくか。この問題に正面から立ち向かっていく人を育てていきたいと思います。人はこの問題と向き合うことによって人類の一員としての自己を鍛えていくことができると思います。

二つは、平等(人権)と平和をどう実現するか、という問題です。格差社会が進行していく中で、貧困に苦しむ人が増えています。失業者が増え、非正規雇用者が増えています。この現実、正規雇用者の未来を不安定にするものであり、自殺者の増大や無差別殺人の現象に見られるように、人々の心を荒廃させていきます。格差拡大を食い止め、お互いの人権を認めあい、貧困をなくすことが国

際平和の実現につながるのではないのでしょうか。このようなことを考える人間になることが求められています。

この二つの課題について、私の考えてきたことをお話しして、皆さんとともに考えていく手がかりを得たいと思っています。

3. ヒロシマの人々

私は学生・院生・助手の時期(1956-69)を広島で過ごしました。その広島での生活の中で「精神的被爆者」になったのだ、と思っています。

夏のある朝、下宿を出て大学へ向かっていると、老婆・中年夫婦・その子どもさんが道ばたで手を合わせてお祈りする姿が見えました。道の端に花を生けた牛乳瓶を置き、一心に祈っているのです。おそらくご家族のどなたかがこのあたりで被爆して亡くなられたのではないのでしょうか。その悲しみはいかばかりだったのでしょうか。厳粛な雰囲気被打たれて私は思わず立ち止まっていました。その後、夏ごとに朝の広島あちこちの道ばたに花を生けてお祈りする家族を見かけることができました。私は、原爆のもたらした悲しみをしみじみと感じました。

大学院で研究を始めた頃、山城巴編『この世界の片隅で』(1965.7 岩波書店)が出版され、被爆2世のことが話題になり始めました。中でも胎内被爆者のことが注目を集めていました。母親の胎内にいた子どもが原爆放射能の影響で障害を持って生まれたという事実が報道され、放射能が次の世代にも影響を与えるのではないかと言う不安が人々の面前に立ち現れたのです。

私は知人に誘われて、「胎内被爆者の家族の生活」をインタビューして記録する運動に加わりました。放射能の影響を正確に知り、正確に伝えようという気持ちからでした。

その頃、胎内被爆者を育てながら岩国市で散髪屋を営んで居られたHさん一家の被爆後の十数年間を聞き書きする、という作業を分担しました。月に一回ぐらいHさん宅を訪ね、一年半ほどメモをとりながらお話を聞きました。障害児を産んだということで母親が親戚の方から非難されたつらさ、障害の子をかかえての理髪店経営の苦勞、我が子の障害が原爆の放射能に起因していることが分かったときの驚きと怒りと悲しみ、など少しず

つ聞くことができ、下宿に帰ってメモを元に時系列に出来事を整理して文章化していきました。私の「聞き取り」活動は、福岡への転任によって中断せざるを得ませんでした。この活動をとおして胎内被爆者を持つ家族の集まりである[きのこ会]の人々と知り合えたこと、によって、原爆の怖ろしさとそれに堪えて生きる人々の力強さに胸を打たれることがしばしばでした。

「原爆は、二度と落としてはならない。ノーモア・ヒロシマ」という思いが強くなり、私は「精神的被爆者」になったのだと思います。

4. 平等(人権)をどう実現するか

フランス革命のスローガンは、自由・平等・博愛でした。その後、この三つのスローガンは、近代社会の理念として追求されてきました。日本の戦後(1945~)は、民主主義の具体化として自由と平等が追求されてきました。企業が自由な活動によって得た富が、働く人々を潤し、人権が等しく保障される豊かな社会にする、と言われてきましたが、結果は大企業の資本蓄積のみを肥大化させ、都市と地方、富める人々と貧しき人々との格差を助長してきました。二〇〇八年末の「年越しテント村」は格差の拡大を象徴的に示した事態でした。

日本の教育も敗戦直後は、六・三制を実施して中学校までを義務教育として一五歳までの全員修学を実施してきました。新制高等学校は、小学区・男女共学・総合選抜の制度を実施し、地域の高校生は可能な限り地域の高等学校で平等に学ぶ制度を確立したのでした。

しかし、一九六〇年代の所得倍増政策のもとに急速な経済成長が進み、高校進学率が上昇し高等学校の増設が進みました。戦後の「みんなで、いっしょに、同じものを」という平等の教育という理念は、実際には指導要領による拘束もあって学習内容の標準化という名の下に「画一化・非個性化」を招き、世間の批判を受けるようになりました。1973年のオイルショック以後の自由競争による生産性の向上は、大学進学者の増大と受験競争を激化させ普通高校と職業高校及び普通高校間の格差を招き、「教育における平等の追求」は社会の変化にともなってなしくずしに崩壊していきました。

このようにして、二十一世紀の初頭には、日本

は格差社会になっていました。フリーター・パート労働者・非正規雇用者が増え、人々も二〇〇五年頃からは、人生に希望がもてない社会になっていることを実感しはじめました。

戦後の理想であった「自由」で「平等」な社会の追求が、二十一世紀には両立しがたくなってきたのでした。自由が強調されると格差と貧困が生まれる。平等を実現するには何らかの社会的コントロールが必要になる。統制しコントロールすると新しいものを工夫し生み出そうとする自由が圧迫される。自由が抑制され変革や向上への意欲がそがれる。この矛盾と葛藤の中に生きているのが現代社会である。どのようにして平等を保障しつつ自由も保持していくか。

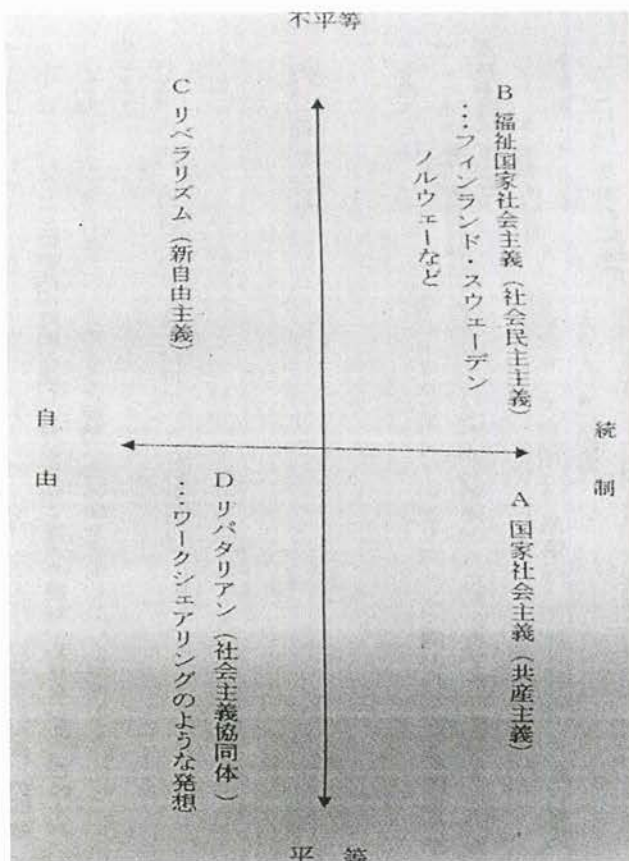
ここで、あらためて近代革命の初心をふり返って「博愛」の理念を評価し直すことが必要ではないか、と私は考えています。欲望と競争を抑制して、収益を分かち合うと言う考え方です。例えば、広島電鉄の労使は、この六月に非正規雇用者を正規雇用者にするために正規雇用者の昇給を低減する案に同意しました。すると社内が明るくなり、生産効率が上がっている、と報道されています。

5. これからの世界

これからの世界の課題は二つ有ると思います。一つは国家を越える地域共同体の模索であり、二つは核兵器の廃絶であります。

① 国家を越える地域共同体の模索

アメリカの言語学者・チョムスキーは、一九七一年に講演「未来の国家」という講演で、高度産業時代の国家のあり方には四つのタイプがあると述べています。



A は旧ソ連型です。権力によって秩序を保持しようとして崩壊しました。C は、市場経済主義です。新自由主義経済の国家ですが、昨年九月のリーマンショックで破綻しました。

これからの世界は B・D の方向へ向かうでしょう。

B は、社会民主主義の方向ですが、税金を多く取らなければならないため産業の発展に危惧がもたれています。D は、地方自治体・労働組合・NPO など協同体の連合体のようなものが構想されています。チョムスキーは、これからは理念的な国家としてこの協同体を追求すべきであると述べています。協議によって連合体を運営し、個人の欲望を抑えて分かち合い(博愛)を理念とするという二点に特質があります。目標としての理念体ですが、EU(ヨーロッパ共同体)がその理念を現実化しつつあります。その集合体が国際連合です。私はこの考え方に共感しています。

実際に各地で紛争が起こっており、戦争がおこなわれている現状において、「国家を超える」協同体の実現は困難を極めるでしょうが、理想を実現しようという動きも現れてきています。

例えば、極東アジアの三国(日本・中国・韓国)で「非核共同宣言をしよう」という提案がなされて

います。また、つい先日のことですが、鳥取県・韓国江原道・中国吉林省・ロシア沿海地方・モンゴル中央部の五地域の首長が参加して第一四回北東アジア地方政府サミットが経済をテーマに開催されました。経済・文化・教育・観光などできることから、国境を越える交流を広げ深めていくことです。その交流は、言葉の違い・生活習慣の違いなど準備段階から困難を極めるでしょうが先ず、それをどのように克服するか考える力を養いたいと思います。

② 核兵器の廃絶について

世界で最初の原爆を投下されたヒロシマの悲惨と怒りを描いた『黒い雨』(井伏鱒二)には、被爆の数日後、集められた死体を穴に投げ入れて焼却する作業をしていた兵士が、やりきれない思いを次のような言葉で語ります。

「わしらは国家のない国に生まれたかったのう」
この兵士たちは、国家があるから戦争をするのだ、と身にしみて感じていたのかもしれませんが。私は『黒い雨』を何度か読んできましたが、初読の日以来、この言葉が忘れられません。

現在、環境破壊が人類の危機として問題になってきていますが、私は、核兵器の使用(核実験を含む)こそ最大の環境破壊であると考えています。ヒロシマ・ナガサキの被爆者を中心に60年間にわたって核兵器廃絶の運動が続けられてきましたが、今年は、ようやく核兵器廃絶が国際的な行動目標のプログラムに上がってきました。

皆さんもよくご存じのことですが、今年四月五日にアメリカのオバマ大統領がチェコのプラハにおいて「核兵器なき世界」A World Without Nuclear Weapons という演説をおこないました。オバマ大統領は、「核兵器を使用したことのある唯一の核保有国として、米国には行動する道義的責任があります。わが国だけではこの取り組みを成功させることはできませんが、その先頭に立つことはできます。・・・アメリカは平和で安全な核兵器なき世界の追求に全力で取り組みます。」と述べました。核兵器を投下した国の道義的責任に言及したことに私は強い感銘を受けました。核兵器の使用と保持をパワーゲームとしてではなく「道義」の問題として取り上げたことに核兵器廃絶の新しい展望を拓く視点の提起がありました。

このオバマ大統領の提起を受け止めて、どのよ

うに廃絶への運動を展開していくか考えていきたい
と思います。それを考えていく習慣と力を身に
付けていきたいと思っています。

6. 考える力

ユネスコは、一九九一年三月にオーストラリア
のブリスベンで開かれた教育専門家会議で「ユネ
スコ国際教育指針」を採択し、これからの子ども
たちに育てたい能力として、九項目を掲げました。

a 批判的思考、b 問題解決、c 協同、d 想像力、e
自己主張、f 対立解決、g 寛容、h 参加、i コミュ
ニケーション能力

ここには、知識の記憶量や模倣する力などは見
られず、急激に変化していく状況に対処してい
く状況対応力が求められています。これを、次の
ように思考力と精神・習慣との二つに分けて捉え
ることができようかと思っています。

A 精神・習慣

c 協同、e 自己主張、g 寛容、h、参加、i コミュ
ニケーション能力

B 思考力

a 批判的思考、b 問題解決、d 想像力、f 対立解決

A 精神・習慣は、きちんと自己主張しつつ他者
の立場を想像して寛容になる心であり、相互のコ
ミュニケーションをとおして協同する能力であり
ます。言葉をみがき「きれいなことば」でコミュ
ニケーションするのです。これを要するに「なか
よくする」精神・習慣であると言えるでしょう。

B これからの社会に求められている思考力は、
偏見・教条・宣伝に惑わされることなく自己の経
験と価値基準に照らして判断していく、批判的思
考力です。世界の諸民族・諸国家が「なかよくす
る」にはどうすればよいかと考えていく対立解決
力です。

ユネスコが、まず最初に「a 批判的思考力」を掲
げているように、私は、これからの人間には「な
かよくする」ための「考える力」を育てたいと思
います。

7. おわりに―育てたい人間像―

子どもたちに何をどのように伝えるか、それは
大人の責任であると思います。これからの世界は
どうあるべきか、どのような生き方が理想的な生
き方であるか、子どもたちに対して、サジェスチ

ョン(示唆)できるのが教師ではないでしょうか。

はじめに紹介しました、石森延男さんの詩
おはなをかざるこ・・・(芸術・文化)
ことばをみがくこ・・・

(コミュニケーション能力・文化)

なかよくするこ・・・(平和・寛容)

に、

考える子・・・(協同)共に生きるにはどうすれば
よいか、考える、

を、育てたい人間の条件としてつけ加えて、私の
つたない話を終わります。

ご静聴有り難うございました。

編集部注 初出

未刊行

(平成二十一年度(社)教育振興尚徳会鳥取支
部年次大会記念講演会

日時 平成二十一年七月十九日(日)

会場対翠閣(十五時三十分~十七時) により
作成された)